

## 原 著

## 高校生版学級担任との日常会話尺度の開発

井村<sup>イムラ</sup> 亘<sup>ワタル</sup>\*、2\* 難波<sup>ナンバ</sup> 知子<sup>トモコ</sup><sup>3\*</sup> 石田実知子<sup>イシダミチコ</sup><sup>4\*</sup>

**目的** 本研究の目的は、高校生と担任間でおこなわれている日常会話の頻度を測定することができる「高校生版学級担任との日常会話尺度」を開発することである。

**方法** 本研究は、調査Ⅰ、Ⅱで構成した。調査Ⅰは、「高校生版学級担任との日常会話尺度（試作版）（以下：試作版尺度）」の構造的妥当性を因子測定モデルと項目の性能の側面から確認することに加えて、信頼性を内的一貫性の側面から確認することを目的とした。調査内容は、高校生の担任との日常会話頻度とし、試作版尺度を用いて測定した。試作版尺度の因子測定モデルは、確認的因子分析を用い、項目の性能は、項目反応理論を用いて検討した。また、内的一貫性は、McDonaldの $\omega$ 信頼性係数を用いて検討した。調査Ⅱは、試作版尺度の仮説検証による妥当性を確認することを目的とした。調査内容は、担任との日常会話頻度、担任サポート期待、抑うつ・不安、担任との関係性で構成した。担任との日常会話頻度は、試作版尺度を用いて測定した。分析は、担任との日常会話頻度が担任サポート期待、抑うつ・不安に影響するとしたモデルと担任との日常会話頻度が担任との関係性に影響するとした2つのモデルを構築し、そのモデルの適合性と変数間の関連性について構造方程式モデリングを用いて検討した。仮説は、前記2つのモデルがともに調査データと当てはまっていることに加えて、担任との日常会話頻度と担任サポート期待、担任との関係性は強い有意な正の関連を示し、抑うつ・不安は弱いながらも有意な負の関連を示すとした。

**結果** 調査Ⅰの分析対象者は、1～3年生1,394人であった。確認的因子分析、項目反応理論、McDonaldの $\omega$ 信頼性係数の結果は、基準を満たす値であった。調査Ⅱの分析対象者は、1～3年生1,688人であった。分析結果から仮説は支持された。

**結論** 本研究結果は、試作版尺度が概念的次元性を備えており、かつ、各項目の難易度のバランスの取れた尺度であることを示唆しており、「高校生版学級担任との日常会話尺度」が開発されたことを示している。本尺度を活用し、担任との日常会話頻度が高校生の心理・行動に与える影響を検討することにより、担任による高校生のメンタルヘルス不調に対する一次予防策に資する知見を得ることが可能になると考える。本尺度は、今後の公衆衛生における学校保健活動に寄与するものであると料する。

**Key words** : 日常会話, 尺度開発, 高校生, 学級担任

日本公衆衛生雑誌 2024; 71(5): 266–274. doi:10.11236/jph.23-069

## I 緒 言

高校生は、発達段階的に混乱を抱きやすい時期に当たる<sup>1)</sup>。また、多くの高校生が自身の将来の方向性に悩みを抱えており<sup>2)</sup>、抑うつ状態の者の割合は

低くない<sup>3)</sup>。さらに攻撃性<sup>4)</sup>や自傷行為<sup>5)</sup>なども高まり、社会的なサポートを必要とする時期である。そのような状況の中、学級担任（以下：担任）は、彼らが日中の大半を過ごす学校社会で最も近くにいる存在であり、高校生にとって精神保健的なサポート提供者として重要な役割を担っていると考えられる。先行研究においても、教師に対するサポートの利用可能性の認知であるサポート期待と高校生の行動・心理状態との関連<sup>6)</sup>や、友人や家族よりも教師に対するサポート期待が幸福感と強く関連することが明らかにされており<sup>7)</sup>、担任に対するサポート期

\* 川崎医療福祉大学大学院医療技術学研究科健康科学専攻

2\* 玉野総合医療専門学校作業療法学科

3\* 川崎医療福祉大学医療技術学部健康体育学専攻

4\* 川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科

責任著者連絡先：〒706-0002 玉野市築港 1-1-20

玉野総合医療専門学校作業療法学科 井村 亘

待の向上は、高校生の精神保健上重要と考えられる。しかしながら、高校生がサポート提供者として認識している他者は、友人や家族であること<sup>8)</sup>や、精神的不調について担任には相談しにくいと感じている者が多いこと<sup>9)</sup>など、高校生の担任に対するサポート期待が高くはない実態も示されている。

サポート期待に影響を与える大きな要因にサポート受容者(以下:受容者)とサポート提供者(以下:提供者)との関係性がある<sup>10)</sup>。関係性の構築には、会話を通じたコミュニケーションが重要であり、その会話は、問題解決に焦点を当てた「道具的コミュニケーション<sup>11)</sup>」としての会話ではなく、雑談や自己開示など、コミュニケーションそのものが目的となる「自己充足的なコミュニケーション<sup>11)</sup>」が有効とされる<sup>12,13)</sup>。また、受容者と提供者の関係性を重視したソーシャルサポート理論である Relational Regulation Theory (以下:RRT)では、社会的相互作用をサポート期待や感情・気分を規定する要因として位置付けている<sup>10)</sup>。とくに社会的相互作用の中でも日常的な会話を重要視しており、大学生、成人を対象に日常的な会話の質とサポート期待、感情・気分の関連を明らかにしている<sup>14)</sup>。RRTにおける日常的な会話は、ストレス対処に関するものではなく、受容者が好む楽しい出来事や通常の生活についての内容であり、「会話すること自体を主目的とする会話」と捉えられる。これらのことを勘案すると高校生と担任間の日常的に交わされる前記会話内容の実践は、生徒の精神保健上重要であることが推察できるものの、その実証的な検討はされていない。

さて、概念と概念の関連性の検討において、目的とする概念を適切に測定ができる尺度は不可欠である。現在、会話の質の測定ができる尺度<sup>15)</sup>は開発されているが、その尺度は、会話の際に知覚する感情を測定しており、その結果から、どのような会話の実践が好感情に結びつくのかという具体的な示唆を得ることは難しい。他方、高校生が担任に求める共通性の高い会話内容は明らかにされており<sup>16)</sup>、その中には、「会話すること自体を主目的とする会話」が含まれている。しかし、この会話内容の実践を測定できる尺度は開発されておらず、高校生と担任間の前記会話の実践が生徒のメンタルヘルスに与える影響を検討することは難しい。

そこで、本研究は尺度開発における国際基準である Consensus-Based Standards for the Selection of Health Measurement Instruments (以下: COSMIN)<sup>17)</sup>の測定特性の分類を参考に、高校生と担任間でおこなわれている生徒が担任に求める「会

話すること自体を主目的とする会話」の頻度の測定ができる「高校生版学級担任との日常会話尺度」の開発を目的として調査Ⅰ、Ⅱを実施した。本尺度の開発は、高校生のメンタルヘルスの維持向上を目指した、担任による支援方法の考案につながると思われる。

## Ⅱ 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究における担任との日常会話とは、高校生が担任に求める「会話すること自体を主目的とする会話」とした。つまり、問題解決に焦点を当てた会話ではなく、会話を楽しむことや自分の気持ちや考えを伝えるなどの会話を日常会話とした。

### 2. 調査Ⅰの目的・方法

#### 1) 目的

調査Ⅰは、「高校生版学級担任との日常会話尺度(試作版)」(以下:「試作版尺度」)の構造的妥当性を因子測定モデルと項目の性能の側面から確認することに加え、信頼性を内的一貫性の側面から確認することを目的とした。

#### 2) 研究デザイン

研究デザインは、自記式質問紙による横断研究とした。

#### 3) 方法

##### (1) 調査対象

調査協力の得られた普通科高等学校3校に在籍する1,680人の生徒を対象に調査を実施した。調査対象を普通科高等学校に在籍する生徒とした理由は、日本の高校生の73.6%が普通科に在籍している<sup>18)</sup>ことから、本研究結果の一般化を考え、対象を普通科に在籍する高校生に設定した。

##### (2) 調査方法

調査はホームルームの時間に行い、対象者への教示は、研究者が研究方法や対象者に対する倫理的な配慮について説明している調査説明用動画を用いて実施した。調査時期は、2022年6月下旬および10月上旬であった。

##### (3) 調査内容

調査内容は、基本属性(性別、学年)、担任との日常会話頻度とした。

担任との日常会話頻度の測定は、「試作版尺度」を用いた。前記尺度の項目は、先行研究において明らかとなった高校生が担任に求める共通性の高い会話内容<sup>16)</sup>の中から選定することとした。項目の選定は、「会話すること自体を主目的とする会話」の内容であるかの視点で、高校生の精神保健分野の研究者2人で協議して実施した。その結果、「将来像」、

「クラスのこと」、「部活動」、「冗談事」、「人生経験」の5項目が選定された。設問は、「過去1か月で担任との授業以外の会話について尋ねます」とした。調査では、前記5項目に内容例(表1の内容例を参照)を添えて対象者に提示した。選択肢数は、回答が比較的容易であり、日本では中心点に回答が集中するという指摘<sup>19)</sup>をかながみて4件法を採用した。得点化は「しなかった」に1点、「あまりしなかった」に2点、「時々した」に3点、「よくした」に4点を付与し、得点が高いほど担任との日常会話頻度が高いことを示すように設定した。

#### (4) 分析方法

「試作版尺度」の構造的妥当性の因子測定モデルの側面は、確認的因子分析を用い、項目の性能の側面は、項目反応理論((Item Response Theory)以下:IRT)を用いて検討した。また、信頼性を内的一貫性の側面から検討した。なお、尺度の構造は、1因子モデルを仮定して分析を実施した。

確認的因子分析における因子測定モデルのデータへの適合性は、適合度指標であるComparative Fit Index(以下:CFI)とRoot Mean Square Error of Approximation(以下:RMSEA)で判定し、順序尺度の推定法として推奨されているロバスト重み付き最小二乗法<sup>20)</sup>によりパラメーターの推定をおこなった。一般的にCFIは0.90以上、RMSEAは0.1を超えていなければモデルにデータが当てはまっていると判断される<sup>21)</sup>。分析モデルにおける標準化推定値(以下:パス係数)の有意性は、非標準化推定値を標準誤差で除した値の絶対値が1.96以上(5%有意水準)を示したものを統計学的に有意とした。

IRTによる各項目の性能は、識別力と困難度を用いて検討した。識別力は0.2~2.0、困難度は4.0以下を基準値とした<sup>22)</sup>。本研究で用いたIRTモデルは、順序尺度のデータに適していると考えられているGeneralized Partial Credit Model<sup>23)</sup>を採用し、項目のパラメーターの推定にはEasy Est GRMによる周辺最尤法を用いた。

内的一貫性は、McDonaldの $\omega$ 信頼性係数(以下: $\omega$ 信頼性係数)を用いて検討した。なお、0.7以上を基準値とした<sup>24)</sup>。

以上の統計解析には、Mplus8.5, Exametrika ver5.3, HAD15.0を使用した。

## 2. 調査Ⅱの目的・方法

### 1) 目的

調査Ⅱは、「試作版尺度」の仮説検証による妥当性を確認することを目的とした。

### 2) 研究デザイン

研究デザインは、自記式質問紙による横断研究と

した。

### 3) 方法

「試作版尺度」の仮説検証による妥当性を以下の2つの関連モデル(AとB)を構築して検討した。

#### (1) 関連モデル

##### ① 関連モデルA

関連モデルAは、受容者と提供者の社会的相互作用が受容者の提供者に対するサポート期待および感情・気分に影響を与えるというRRT<sup>10)</sup>をもとに設定した。具体的には、担任との日常会話頻度が高校生の担任に対するサポート期待(以下:担任サポート期待)および抑うつ・不安に影響を与えるとしたモデルを構築した。

##### ② 関連モデルB

コミュニケーション自体を目的としたコミュニケーションは、関係性の構築<sup>12,13)</sup>に重要であると考えられている。そのため、関連モデルBとして、担任との日常会話頻度が担任との関係性に影響を与えるとしたモデルを構築した。

#### (2) 調査対象

調査協力の得られた調査Ⅰとは異なる普通科高等学校5校に在籍する2,280人の生徒を対象に調査を実施した。調査対象を普通科高等学校に在籍する者とした理由は、調査Ⅰと同様である。

#### (3) 調査方法

調査の実施方法は調査Ⅰと同様とした。調査時期は、2022年10月下旬~12月末であった。

#### (4) 調査内容

調査内容は、基本属性(性別、学年)、担任との日常会話頻度、担任サポート期待、抑うつ・不安、担任との関係性で構成した。

##### ① 担任との日常会話頻度の測定

担任との日常会話頻度の測定には、「試作版尺度」を用いた。

##### ② 担任サポート期待の測定

担任サポート期待の測定には、「教師サポート尺度<sup>25)</sup>」を改変して用いた。改変箇所は、質問の文言における「教師」を「担任」に改変した。前記尺度は、担任からもたらされる情緒的サポート、道具的サポートの期待値の程度を尋ねるものであり、それぞれのサポートの期待値が高いほど得点が高くなるように設定されている。

##### ③ 抑うつ・不安の測定

抑うつ・不安の測定には、「K6質問票日本語版<sup>26)</sup>」を用いた。前記尺度は、過去30日間の気分の落ち込みや不安の程度を尋ねるものであり、抑うつ・不安が高いほど得点が高くなるように設定されている。

#### ④ 担任との関係性の測定

担任との関係性の測定には、「学校適応感尺度<sup>27)</sup>」の教師関係の因子を抜粋し、改変して用いた。改変箇所は、質問の文言における「学校の先生」を「担任の先生」に改変した。前記尺度は、高校生が担任に抱く信頼・満足・親しみ・気安さの認識を尋ねるものであり、担任との関係性が良好であるほど得点が高くなるように設定されている。なお、「担任の先生に対して不満がある」の項目に関しては、逆転項目として捉えて、逆転処理したうえで得点化した。

#### (5) 分析方法

分析は、各関連モデルと本調査データの適合性と各変数間の関連性について構造方程式モデリングを用いて検討した。また、各関連モデルには、バイアスとなる可能性の高い性別（1=男性 2=女性<sup>25,28)</sup>と学年<sup>25,28)</sup>を統制変数として投入した。なお、本研究の結果の正確を期すため、関連モデルの検討に先立って各尺度の構造的妥当性の因子測定モデルの側面は、確認的因子分析を用い、項目の性能の側面は、IRTを用いて確認した。さらに、内的一貫性を $\omega$ 信頼性係数を用いて確認した。なお、「試作版尺度」、「K6 質問票日本語版<sup>26)</sup>」、「学校適応感尺度<sup>27)</sup>」の教師関連因子（改変版）は1因子モデル、「教師サポート尺度<sup>27)</sup>（改変版）」は、情緒的サポート、道具的サポートの2因子斜交モデルを仮定して分析を実施した。

これらの分析における推定法、有意水準、基準値、解析ソフトは調査Iと同様とした。

#### (6) 仮説

##### ① 関連モデルAの分析結果に対する仮説

関連モデルAと本調査データが当てはまっている。かつ、担任との日常会話頻度と担任サポート期待は有意な正の関連を示し、抑うつ・不安は有意な負の関連を示す。また、担任との日常会話頻度と担任サポート期待の関連は、両概念における対象者が担任に限定されていることから、比較的強い。一方、担任との日常会話頻度と高校生の抑うつ・不安の関連は、高校生の抑うつや不安の要因は多岐にわたる<sup>2)</sup>ため、担任との日常会話頻度で説明ができる部分は限定的であることから、比較的弱い。

##### ② 関連モデルBの分析結果に対する仮説

関連モデルBと本調査データが当てはまっている。かつ、担任との日常会話頻度と担任との関係性は有意な正の関連を示す。また、担任との日常会話頻度と担任との関係性の関連は、両概念における対象者が担任に限定されていることから、比較的強い。

なお、各分析結果における変数間の関連の強弱の基準は、Gignac<sup>29)</sup>の基準を参考にしてパス係数0.1

を弱いとし、0.3以上を強いとした。

#### 4. 倫理的配慮

調査I、IIともに、対象高等学校の学校長に承認を得た上で実施した。また、調査票には研究目的、内容、手順、利益、不利益、匿名性について明記し、実施時には対象者に対してそれらについて動画を用いて説明した上で調査への協力を求めた。また、調査票には同意のチェック欄を設け、同意が確認できたものを対象とした。調査票とともに各個人の秘密厳守をするための個別の封筒を配布し、生徒自身によって厳封された調査票の提出をもって研究参加の同意とした。なお、本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認（調査I：受付番号21-115、2022年5月20日承認 調査II：受付番号22-034、2022年9月21日承認）を得て実施したものである。

### III 研究結果

#### 1. 調査Iの結果

##### 1) 分析対象者の属性分布

同意を得られた回答者は1,451人（回収率：86.4%）であった。このうち、調査項目に欠損を有さない1年生453人（男性：248人、女性：205人）、2年生465人（男性：264人、女性：201人）、3年生476人（男性：258人、女性：218人）の計1,394人（男性：770人、女性：624人）を分析対象とした（有効回答率96.1%）。

##### 2) 「試作版尺度」の確認的因子分析、IRT、 $\omega$ 信頼性係数の結果（表1）

確認的因子分析の結果、因子測定モデルと本調査データへの適合度は、CFI = 0.993, RMSEA = 0.076であり許容水準を満たしていた。また、因子から各観測変数へ向かうパス係数はいずれも統計学的に有意であり、0.656~0.828の範囲であった。IRTの結果、識別力は、0.963~1.332、困難度は、-1.435~1.958であり、基準値の範囲内であった。 $\omega$ 信頼性係数は、0.823であり、基準を満たす値であった。

#### 2. 調査IIの結果

##### 1) 分析対象者の属性分布

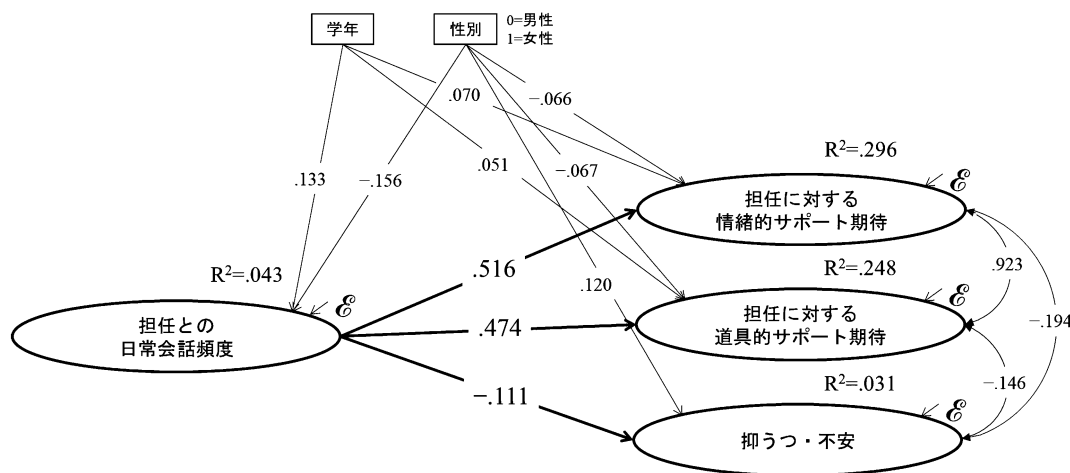
同意を得られた回答者は1,888人（回収率：82.8%）であった。このうち、調査項目に欠損を有さない1年生542人（男性：285人、女性：257人）、2年生478人（男性：274人、女性：204人）、3年生668人（男性：362人、女性：306人）の計1,688人（男性：921人、女性：767人）を分析対象とした（有効回答率89.4%）。

表1 「高校生版学級担任との日常会話尺度（試作版）」の確認的因子分析，IRT， $\omega$  信頼性係数の結果  
n=1,394 単位：人（%）

項目	内容例	回答カテゴリ				確認的因子分析の結果		IRTの結果				$\omega$ 信頼性係数
		しなかった	あまりしなかった	時々した	よくした	適合度	パス係数	$\alpha$	$\beta_1$	$\beta_2$	$\beta_3$	
x1	将来像 自分の将来や未来，夢など	300(21.5)	514(36.9)	430(30.8)	150(10.8)	CFI 0.993 RMSEA 0.076	0.656	1.332	-1.423	0.269	1.958	0.823
x2	クラスのこと クラスの雰囲気，授業中の状況など	276(19.8)	401(28.8)	486(34.9)	231(16.6)							
x3	部活動 部活動の成績，内容など	593(42.5)	332(23.8)	309(22.2)	160(11.5)							
x4	冗談事 面白い話，楽しい話など	428(30.7)	345(24.7)	351(25.2)	270(19.4)							
x5	人生経験 人生経験の中で印象に残った出来事，タメになった出来事など	455(32.6)	397(28.5)	361(25.9)	181(13.0)							

\*パス係数はいずれも統計学的に有意であった  
\* $\alpha$ ：識別力  $\beta_1, 2, 3$ ：困難度

図1 関連モデルAの分析結果



n=1,688 x²= 756.347 df=175 CFI=0.995 RMSEA=0.044

\*実線は有意な関連性を示す  
• 図の煩雑化を避けるために非有意なパス，潜在変数によって観測される観測変数および潜在変数間，観測変数間，誤差変数間の相関は省略した

2) 各尺度の確認的因子分析，IRT， $\omega$  信頼性係数の結果

「試作版尺度」の確認的因子分析の結果，適合度は，CFI = 0.988，RMSEA = 0.065であった。IRT結果，識別力は，0.964~1.544，困難度は，-1.866~1.861であった。 $\omega$  信頼性係数は，0.818であった。

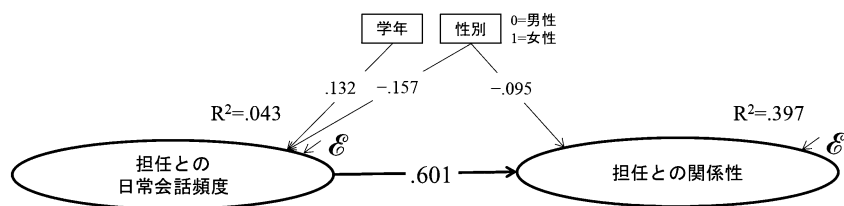
「教師サポート尺度<sup>25)</sup> (改変版)」の確認的因子分析の結果，適合度は，CFI = 0.997，RMSEA = 0.095であった。なお，「あなたに期待してくれると思う」と「あなたが元気がないとき励ましてくれると思う」の項目の誤差変数間に相関を認めた。IRT結果，情緒的サポート因子の識別力は，1.432~

1.491，困難度は，-1.784~1.250であり，道具的サポート因子の識別力は，1.620~1.644，困難度は，-1.744~0.749であった。 $\omega$  信頼性係数は，情緒的サポート因子は0.911，道具的サポート因子は0.941であった。

「K6 質問票日本語版<sup>26)</sup>」の確認的因子分析の結果，適合度は，CFI = 0.997，RMSEA = 0.070であった。IRTの結果，識別力は，0.965~1.184，困難度は，-0.750~2.549であった。 $\omega$  信頼性係数は，0.918であった。

「学校適応感尺度<sup>27)</sup>の教師関連因子 (改変版)」の確認的因子分析の結果，適合度は，CFI > 0.999，

図2 関連モデルBの分析結果



$n=1,688$   $\chi^2=315.855$   $df=39$   $CFI=0.988$   $RMSEA=0.065$

\*実線は有意な関連性を示す

•図の煩雑化を避けるために非有意なパス，潜在変数によって観測される観測変数および観測変数間，誤差変数間の相関は省略した

RMSEA<0.001であった。なお、「担任の先生には安心して何でも相談できると思う」と「担任の先生に対して不満がある」の項目の誤差変数間に相関を認めた。IRT結果，識別力は，1.017~1.228，困難度は，-2.849~1.496であった。 $\omega$ 信頼性係数は，0.872であった。

これらの結果から，いずれの尺度ともに適合度は許容水準を満たし，識別力，困難度はともに基準値の範囲内であり， $\omega$ 信頼性係数においても基準を満たす値であることが示された。

### 3) 関連モデルAの分析結果(図1)

関連モデルAと本調査データへの適合度はCFI=0.995，RMSEA=0.044であり，許容水準を満たしていた。また，担任との日常会話頻度と担任サポート期待における情緒的サポート，道具的サポートは，統計学的に有意な強い正の関連を示し(0.516，0.474)，抑うつ・不安は，有意な弱い負の関連を示していた(-0.111)。これらの結果は，仮説を支持するものであった。

### 4) 関連モデルBの分析結果(図2)

関連モデルBと本調査データへの適合度はCFI=0.988，RMSEA=0.065であり，許容水準を満たしていた。また，担任との日常会話頻度と担任との関係性は，統計学的に有意な強い正の関連を示していた(0.601)。これらの結果は，仮説を支持するものであった。

## IV 考 察

本研究は、「高校生版学級担任との日常会話尺度」の開発を目的に調査I・IIを実施した。その結果，「試作版尺度」の構造的妥当性が，因子測定モデルの側面と項目の性能の側面から確認され，仮説検証による妥当性と内的一貫性の側面から信頼性についても確認された。このことは，本尺度が概念的・一次元性を備えており，かつ，各項目の難易度のバランスの取れた尺度であることを示している。加えて，

本尺度は，5項目4件法で構成されており，短時間で測定が可能であることから，尺度において重要視される能率性<sup>30)</sup>についても高い尺度であると言える。

現在，高校生のメンタルヘルスの維持向上を目指した取り組みとして，保健教育<sup>31)</sup>などが実施されているものの，担任が実施すべき具体的な支援については明確にされていない。そのような中，本尺度の開発により，担任との日常会話頻度が高校生の心理・行動に与える影響を検討することが可能になったことは，高校生のメンタルヘルスの維持向上に向けた担任による支援方法の考案に貢献できると考える。すなわち，担任は，高校生のメンタルヘルスの維持向上に向けて，生徒との何気ない日常会話の頻度について意識すべきという知見を得ることができると推察する。また，本尺度は，担任との日常会話頻度の学年・学級差，個人差などの把握のために活用できる。その結果をもとに日常会話頻度が低い生徒に対して，担任は積極的に話し掛けるといった日常会話を媒介とした支援方法を考案することができると考える。これらの支援は，高校生のメンタルヘルス不調に対する一次予防策に繋がるものであり，本尺度は，公衆衛生活動に寄与できるものであると思考する。

本研究の限界には，研究対象者が，母集団となる日本の高校生と人口社会的要因や個人特性要因が異なる可能性のある点，調査IIの各モデルにおいて，未測定の交絡因子の影響を排除しきれていない点，および，COSMINの尺度測定特性の分類<sup>17)</sup>において未検討の項目が存在する点が挙げられる。そのため，これらの点を踏まえた本尺度の交差妥当性の検討が課題である。

調査にあたりご協力を賜りました高等学校の生徒の皆さまならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また，本研究において，「学校適応感尺度」の使用をご許可いただきました愛知教育大学石田靖彦教授に深く感謝

を申し上げます。

なお、本研究に関して開示すべきCOI状態はありません。

(	受付	2023. 7.20
	採用	2023.11.29
	J-STAGE早期公開	2024. 2.21

## 文 献

- 1) Erikson EH. Growth and Crises of the Health Personality. Identity and the Life Cycle. New York: International Universities Press. 1994; 51-107.
- 2) 厚生労働省. 平成26年度全国家庭児童調査結果の概要. 2019. <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/5zentai.pdf> (2023年5月14日アクセス可能).
- 3) 山口祐子, 山口日出彦, 原井宏明. 高校生における抑うつ群・推定うつ病有病率の3年間の縦断的研究. 臨床精神医学 2009; 38: 209-218.
- 4) Sarah E. Kretzman MA, Zimmerman SMS, et al. Adolescent violence: risk, resilience, and prevention. Diclemente RJ, Santelli JS, Crosby RA, Eds. Adolescent Health: Understanding and Preventing Risk Behaviors. San Francisco: Jossey-Bass. 2009; 213-232.
- 5) Plener PL, Schumacher TS, Munz LM, et al. The longitudinal course of non-suicidal self-injury and deliberate self-harm: a systematic review of the literature. Borderline Personality Disorder and Emotion Dysregulation 2015; 2: 1-11.
- 6) 井村 亘, 難波知子. 日本の高校生の教師サポート期待と関連する概念の文献的検討. 川崎医療福祉学会誌 2022; 32: 171-177.
- 7) Chu PS, Saucier DA, Hafner E. Meta-analysis of the relationships between social support and well-being in children and adolescents. Journal of Social and Clinical Psychology 2010; 29: 624-645.
- 8) 尾見康博. 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究. 教育心理学研究 1999; 47: 40-48.
- 9) 厚生労働省. 今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会(第16回)早期支援について. 2009. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0423-7d.pdf> (2023年5月13日アクセス可能).
- 10) Lakey B, Orehek E. Relational regulation theory: a new approach to explain the link between perceived social support and mental health. Psychological Review 2011; 118: 482-495.
- 11) Festinger L. Informal social communication. Psychological Review 1950; 57: 271-282.
- 12) 船津 衛. 集団・組織のコミュニケーション. コミュニケーション・入門改定版. 東京: 有斐閣. 2010; 102-122.
- 13) 古谷嘉一郎. コミュニケーションが関係維持に及ぼす影響についての友人関係機能の仲介効果. 比治山大学現代文化学部紀要 2011; 17: 79-87.
- 14) Lakey B, Hubbard SA, Woods WC. Supportive people evoke positive affect, but do not reduce negative affect, while supportive groups result from favorable dyadic, not group effects. Anxiety, Stress, & Coping An International Journal 2022; 35: 323-338.
- 15) Lakey B, Sain T. Ordinary Conversation Scale (OCS). Worthington DL, Bodie GD, Eds. The Sourcebook of Listening Research: Methodology and Measures. New Jersey: John Wiley & Sons. 2017; 504-508.
- 16) 井村 亘, 難波知子. 高校生が学級担任に求める会話と共有活動の内容. 川崎医療福祉学会誌 2023; 33: 81-88.
- 17) COSMIN. COSMIN Taxonomy of Measurement Properties. 2010. <https://www.cosmin.nl/tools/cosmin-taxonomy-measurement-properties/> (2023年5月13日アクセス可能).
- 18) 文部科学省. 高等学校学科別生徒数・学校数. 2022. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm) (2023年5月13日アクセス可能).
- 19) 岩井紀子, 穴戸邦章, 佐々木尚之. East Social Surveyを通してみた国際比較調査の困難と課題. 社会と調査 2011; 7: 18-25.
- 20) 竹林由武. 順序データのパス解析. 小杉考司, 清水裕士, 編. M-plusとRによる構造方程式モデリング入門. 京都: 北大路書房. 2014; 118-133.
- 21) 小塩真司. 原因も複数・結果も複数. はじめての共分散構造分析 第2版—Amosによるパス解析—. 東京: 東京図書. 2008; 91-124.
- 22) 室橋弘人. 劣等感尺度の構成. 豊田秀樹, 編. 項目反応理論 [事例偏] —心理テストの構成法—. 東京: 朝倉書店. 2002; 20-39.
- 23) 並川 努, 谷 伊織, 脇田貴文, 他. Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討. 心理学研究 2012; 83: 91-99.
- 24) 市原 学. 心理測定におけるテスト理論. 都留文科大研究紀要 2018; 88: 195-214.
- 25) 井村 亘, 渡邊真紀, 石田実知子. 高校生の自傷行為に対する教師サポートと対人ストレスの関連. 学校保健研究 2017; 59: 347-353.
- 26) 古川壽亮, 大野 裕, 宇田英典, 他. 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究—平成14年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究協力報告書—. 2003.
- 27) 石田靖彦. 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討—. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 2009; 12: 287-292.
- 28) 渡邊真紀, 石田実知子, 井村 亘, 他. 高校生の精神的健康に対する教師サポートと対人ストレスおよび怒りへの対処行動の関連. 川崎医療福祉学会 2018; 27: 441-447.
- 29) Gignac GE, Szodorai ET. Effect size guidelines for individual differences researchers. Personality and Individual Differences 2016; 102: 74-78.

- 30) 村上宣寛. 歴史的方法. 心理尺度のつくり方. 京都: 北大路書房. 2006; 1-11. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/20210310-mxt\\_kouhou02-1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/20210310-mxt_kouhou02-1.pdf) (2023年9月14日アクセス可能).
- 31) 文部科学省. 高等学校保健教育参考資料「改訂『生きる力』を育む高等学校保健教育の手引」. 2022.
-



## Development of a High-School Students' Version of the Daily Conversation Scale with Classroom Teachers

Wataru IMURA<sup>\*.2\*</sup>, Tomoko NAMBA<sup>3\*</sup> and Michiko ISHIDA<sup>4\*</sup>

**Key words** : daily conversation, scale development, high-school students, classroom teachers

**Objective** This study was intended to develop a “High-School Students' Version of the Daily Conversation Scale with Classroom Teachers” to measure the frequency of daily conversations between high-school students and their classroom teachers.

**Methods** The study consisted of Surveys I and II. Survey I was intended to validate the structural validity and reliability of the “High-School Students' Daily Conversation Scale with Classroom Teachers (Prototype Version).” It measured the frequency of high-school students' daily conversations with classroom teachers using the prototype scale and employed confirmatory factor analysis and item response theory to assess the factor measurement model and item performance, respectively. Internal consistency was evaluated using McDonald's  $\omega$  (omega) reliability coefficient. Study II was intended to validate the prototype scale through hypothesis testing. The survey assessed daily conversation frequency, teacher support perception, depression/anxiety, and the teacher-student relationship. Two models were constructed: one predicting the impact of daily conversation frequency on support perception and depression/anxiety and the other predicting the impact on the teacher-student relationship. It was hypothesized that both models would fit well, with daily conversation frequency positively associated with support perception and relationship, and depression/anxiety negatively associated with support perception and relationship.

**Result** The sample analyzed in Survey I consisted of 1,394 students in grades 1–3. The results of confirmatory factor analysis, item response theory, and McDonald's omega reliability coefficient met the criteria. The sample for Survey II consisted of 1,688 students in grades 1–3. The results of the analysis supported the hypothesis.

**Conclusion** The results of this study suggest that the prototype version of the scale was conceptually unidimensional and that the difficulty level of each item was well-balanced, indicating the successful development of a “High-School Students' Version of the Daily Conversation Scale with Classroom Teachers.” By using this scale and examining the effects of the frequency of daily conversation with homeroom teachers on the psychology and behavior of high-school students, we believe that it will be possible to contribute to an understanding of primary prevention measures that homeroom teachers can take to address mental health problems among their high-school students. We believe that this scale will contribute to future school health activities in the field of public health.

---

\* Doctoral Program in Health Science, Graduate School of Health Science and Technology, Kawasaki University of Medical Welfare

<sup>2\*</sup> Department of Occupational Therapy, Tamano Institute of Health and Human Services

<sup>3\*</sup> Department of Health and Sports Science, Faculty of Health Science and Technology, Kawasaki University of Medical Welfare

<sup>4\*</sup> Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare